

事例番号 015 「藤原の郷」で蔵を活かしたまち再生(岩手県奥州市(旧江刺市))

1. 背景

旧江刺市は、古くは奥州藤原家の本拠地として、また、江戸期以降は仙台伊達藩の北方の要、北上川の水運による物資の集積地として繁栄した。農作物や酒を貯蔵するための多くの蔵がつくられ、これらは、現在でも中心市街地に多く残されている。1955(昭和30)年に周辺の1町9村が合併して江刺市となり、1958(昭和33)年に市制を施行した。合併時の人口は約49,000人であった。その当時、第1次産業が7割を越すという地域の産業構造の中で、高度経済成長期に若者の労働力流出が続き、1970(昭和45)年までの15年間で人口が約10,000人も減少した。このため人口構成にひずみが生じ、現在においても人口の伸び悩み・少子高齢化の一因となっている。なおその後、市では東北自動車道や新幹線などの国土軸幹線の充実に応じて工業団地の整備などを積極的に行った結果、産業構造の1次産業割合は低下したが、農業は現在でも全就業者の3割(旧江刺市)を占める地域の基幹産業となっている。



奥州市の位置 (資料:奥州市ホームページ)

北上川の水運を背景に、旧江刺市の中心市街地には地域の中核をなす諸機能が古くから集積していたが、近年、物流の主流が水運から鉄道・自動車へシフトしたことや、店舗の郊外立地化の進展などにより、中心市街地の商業機能は激しい衰退傾向をたどり、求心力を失ってきた。

旧江刺市の観光に関しては、1992(平成4)年頃までは入込客数が年間30万人程度で推移していたが、1993(平成5)年にNHK大河ドラマ「炎立つ」で奥州藤原氏が取り上げられることとなったことから、市は投資額約37億円をかけて本格的な寝殿造り建築などの大規模ロケ施設「えさし藤原の郷」を建設・開業し、事業会社として第3セクター江刺開発振興株式会社を設立した。その結果、初年度約75万人、その後も30万人近い集客を実現し、現在でもコンスタントに約13万人の観光客が訪れている。えさし藤原の郷は多くの時代劇の撮影場所として認知されるようになり、俳優や

撮影スタッフが繰り返し市を訪れるという副次的な経済効果をもたらした。

一方、旧江刺市の中心市街地は「えさし藤原の郷」からあまり遠くない距離(約 1km)に位置するものの、立ち寄る観光客は期待されたより少なく、中心地区の衰退傾向の歯止めとはならなかった。これに危機感を持った青年会議所有志が、中心市街地に多く残る蔵を活用して街の活性化対策に動き出した。そして、1996(平成 8)年、株式会社黒船が設立され、滋賀県長浜市の株式会社黒壁と提携した「蔵を活かしたまちづくり」の取り組みが始まった。

2. 目標

現在の中心市街地活性化は、蔵を活かしたまちづくりをキーワードとして街なみ整備と地域活性化事業への取り組みを行い、かつて人や物資の集散地として栄えた旧江刺中心市街地のまち再生を行うことを目標としている。これは、単に「えさし藤原の郷」に來訪する観光客を中心市街地に呼び込んでその経済波及効果を期待するようなマスツーリズム依存の活性化を目指すものではなく、地域の象徴である蔵の空間を活用し、かつて江刺の町衆が持っていた問屋機能や商人文化など、江刺のまち独自の個性や心意気を現代に復活させるような「新しい産業を興していくまちづくり」を目指すものである。

3. 取り組みの体制

「えさし藤原の郷」は旧江刺市が事業主体となって設備投資を行った。テーマパークの運営管理には旧江刺市も出資する第 3 セクター・江刺開発振興株式会社が行っている。また、「炎立つ」の誘致に積極的に関わった青年会議所の OB らが街おこし会社「清衡企画」を設立し、「えさし藤原の郷」の街なみゾーンにおいてイベントや物産販売を行っている。

中心市街地で蔵を活かしたまち「蔵まち江刺」を整備する取り組みは、「えさし藤原の郷」の誘致に動いた青年会議所有志が中心となって設立した「株式会社黒船」が中心主体となっている(資本金 4,600 万円、うち地元資金 3,100 万円。その他に江刺の蔵まちづくりに賛同した地域外の事業者 3 社が 1,500 万円を拠出)。

「株式会社黒船」発足以前から存在する地元組織としては、「えさし藤原の郷」開業の 1993(平成 5)年に中町振興会と商店会とが立ち上げた「中町まちづくり委員会」があり、蔵の保存活動と街なみ整備に取り組んでいる。

江刺商工会議所は 2002(平成 12)年に中心市街地活性化基本計画に基づき市より TMO 機関として認定され、蔵を改造した店舗整備やイベント等に取り組んでいる。

4. 具体策

(1) 「えさし藤原の郷」の整備

江刺青年会議所では、1990(平成 2)年ごろから地域の歴史をテーマに「清衡の郷・江刺」運動を展開していた。1991(平成 3)年に、1993(平成 5)年放映の NHK 大河ドラマが奥州藤原氏を題材とする「炎立つ」に決定したことを受け、市は積極的な誘致活動を展開し、翌年メインロケ地としての誘致が決定された。

従来、大河ドラマのロケは、仮設のセットを中心に行われることが多い。しかしながら、旧江刺市は、地域の歴史・文化を象徴する施設としてその後の地域振興にもつないでいくために、NHK の

協力も得て、恒常的な寝殿造りの建物を建築し、大規模な歴史公園として整備することを決定した。

1993(平成5)年、大河ドラマ放映にあわせて「えさし藤原の郷」を開業、初年度入場者は75万人を計上、開業後10年を越えた最近においても、コンスタントに年間入場者数13万人前後を集めている。この間、NHK大河ドラマを始め、映画や民放においても多くの時代劇のロケ地として採用され、多くの俳優や撮影スタッフが旧江刺市を訪れ、滞在し、一定の経済効果が見られた。

「えさし藤原の郷」の事業概要は以下のとおりである。

所在地 旧江刺市岩谷堂字小名丸(向山総合公園35haの一部)

敷地面積 20ha

施設規模 平安建築群117棟、3,770.94㎡

※施設内容＝歴史的建造物の再現と展示による体験学習施設「歴史公園(野外博物館)」、エンタテインメント性が高い施設「テーマパーク」、地域の紹介・物産販売、地域イベントなどを開催する「地域文化センター」の3つの基本性格を持つ

事業主体 旧江刺市

管理運営主体 江刺開発振興株式会社(第3セクター、1993年設立、資本金1.85億円)

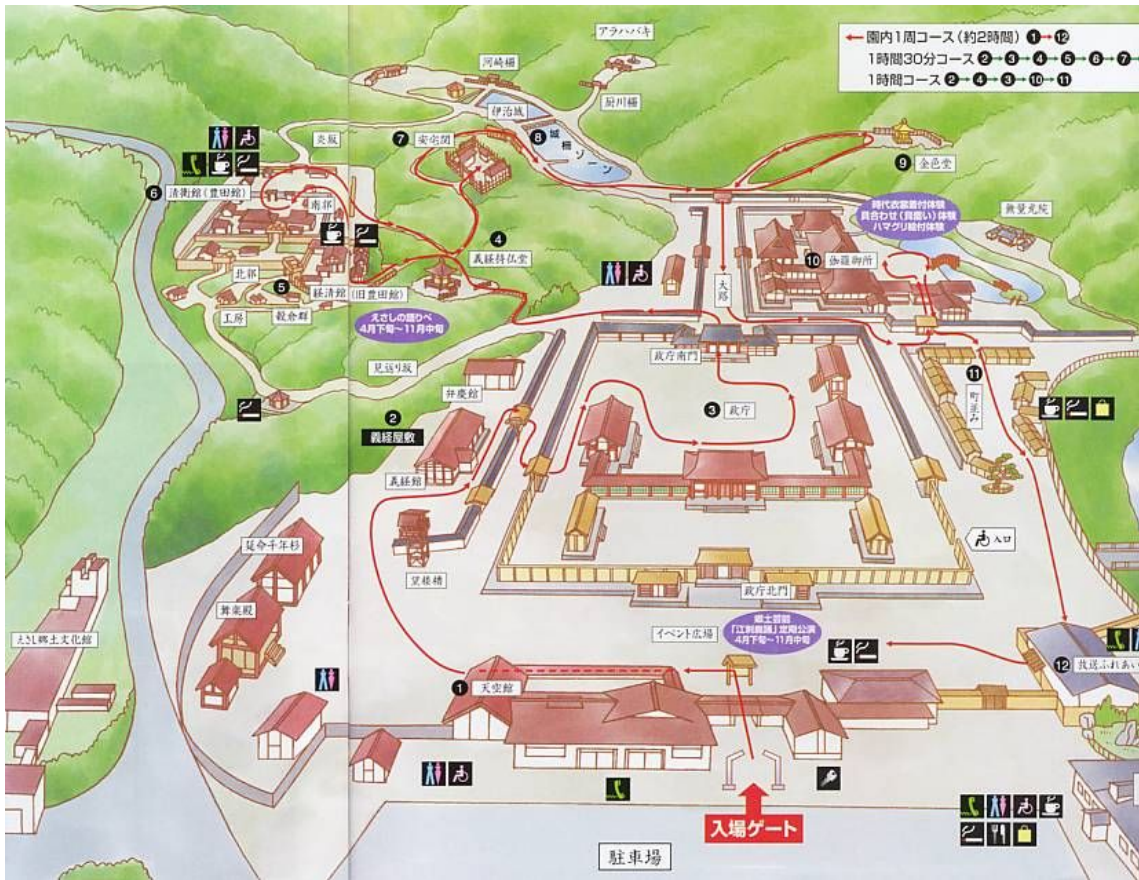
※株主＝旧江刺市、(株)NHK エンタープライズ、花巻温泉(株)、みちのくコココーラボトリング(株)、岩手県交通(株)、(株)岩手銀行、江刺市農業協同組合、江刺商工会議所、(財)岩手県観光協会、(株)日本交通公社

総事業費 36.8億円

※内訳＝県補助1.5億円、起債25.1億円(地域づくり推進事業16.6億円、ふるさとづくり特別対策事業8.5億円)、一般財源10.2億円

入場者数推移

年次	入場者数(人)	入場者累計(人)
1993(平成5)年	752,798	752,798
1994(平成6)年	514,686	1,267,484
1995(平成7)年	286,913	1,554,397
1996(平成8)年	253,813	1,808,210
1997(平成9)年	230,261	2,038,471
1998(平成10)年	174,513	2,212,984
1999(平成11)年	138,643	2,351,627
2000(平成12)年	126,838	2,478,465
2001(平成13)年	143,365	2,621,830
2002(平成14)年	138,068	2,759,898
2003(平成15)年	140,761	2,899,152
2004(平成16)年	131,620	3,030,772



「えさし藤原の郷」全体図 (資料:「歴史公園えさし藤原の郷」パンフレット)



簡易なセットではなく本物の寝殿造りの施設 (資料:「歴史公園えさし藤原の郷」パンフレット)

(2) 蔵を活かしたまちづくり

旧江刺市の中心市街地では大型店の郊外進出などに伴い空洞化の傾向が目立っていた。そのため、商店経営者などの危機感を背景に、市は 1985(昭和 60)年から川原町、六日町、中町などの目抜き通りを対象として商店街近代化事業に着手した。その結果、1988(昭和 63)年に川原町(幅員 14m、カラー歩道片側 2.5m)、1989(平成元)年に六日町(幅員 14m、カラー歩道片側 2.5m)のハード整備が完了したが、衰退傾向の歯止めに大きな効果は上がらなかった。市は、ハード整備が誘客に結びつかなかったこの事実を反省し、続いて着手した中町商店街を南北に走る「中町小堺線」街路整備計画(幅員 16m、カラー歩道片側 3.5m)においては、事業実施にあたって官民一体で「中町地区商店街活性化街路事業基本計画」を策定した。そして、この計画に蔵を活用した街なみ整備の方針を盛り込んだ。1993(平成 5)年には中町振興会と商店会とが「中町まちづくり委員会」を立ち上げ、蔵の保存活動と街なみ整備への取り組みを本格的に開始した。具体的には、表通りや裏通りに点在する蔵の活用、新增築に関して建築物の軒高、屋根の形、色などについて一定のルールを定めた「まちづくり協定」を締結した。

街づくり協定が制定された 1993(平成 5)年は「えさし藤原の郷」の開業の年であり、観光客増加による中心市街地への波及効果も期待されたが、結果的には、期待を大きく下回った。一方、ロケ地の誘致から「えさし藤原の郷」の開業、営業に際しては、市、商工会議所、江刺青年会議所の会員・OB が積極的に活動を展開したが、その過程において青年会議所の OB らが参加したまちづくりの勉強会において滋賀県長浜の第 3 セクターのまちづくり会社「株式会社黒壁」のメンバーと出会った。そして、青年会議所 OB の 30~40 代の若手経営者は、先進地長浜の蔵を活かした街づくりのノウハウを導入し、民間主導で本格的な事業に取り組み始めた。1997(平成 9)年には「株式会社黒船」(設立時の資本金 4,600 万円)を設立した。「黒船」という名前は、鎖国状態から開国へ導くきっかけの象徴となるように、町にインパクトを与えるという思いを込めたものである。

1998(平成 10)年には中町のほぼ真ん中にシンボル施設として「黒壁ガラス館」を建設し運営を開始した。これはガラス製品(長浜の黒壁が商品供給や運営ノウハウで協力)の製造販売を行う施設である。また、中町界隈を黒船スクエアとして回遊性のある街なみにする取り組みを始めた。



蔵町モールの街路整備



蔵を改築したカフェ



江刺中心市街地周辺のイラストマップ（資料：「蔵まち江刺まっぷ」）



蔵まち江刺のシンボル「黒壁ガラス館」の外観



店内の様子

5. 特徴的手法

まちづくりに関心の高い住民、青年会議所 OB など民間の商店主、及び地域外からの応援団の資金を活用した蔵の再生・有効活用事業が特徴となっている。また、集客数で評価するようなマストールズムではなく、かつて北上川の水運による物資・人材の集積地であった江刺のまちを象徴する「蔵の空間や景観」を活かし、江刺の個性を活かした新しい産業創出につながるような事業を起こしていくことをまちづくりの基本方針として設定していることも特徴的である。

6. 課題

「蔵まち江刺」の整備では中心となる収益事業が育っておらず、財政基盤の確立が課題となっている。

(参考・引用文献)

奥州市ホームページ

旧江刺市ホームページ

江刺商工会議所ホームページ

『江刺市の中心市街地活性化に向けて 蔵の街、音・水・緑のまちづくり』江刺市・江刺商工会議所

『歴史公園えさし藤原の郷』江刺開発振興株式会社(パンフレット)

『蔵まち江刺散歩魅知(みち) 蔵まち江刺まっふ』江刺商工会議所(パンフレット)

『Cabiネット No.84』2005.10.15号